

## 戦後 50 年以降の日本社会と「子どもの戦争の記憶」 — 『少年 H』 論争に潜む欲望と抵抗 —

Japanese society 50 years after the end of World War II and  
“Memories of Children’s War”  
-Desire and resistance hidden in the controversy of “Boy H”-

小酒奈穂子\*

### はじめに

本稿の目的は、戦後 50 年以降、「子どもの戦争の記憶」はなぜ論争になったのかを検討し、この論争が日本人の戦争観に何をもたらしただのかを検証することである。

本稿では、「子どもの戦争の記憶」とは終戦時直後、幼少期から少年少女時代だった 1930 年代生まれ世代<sup>1)</sup>の戦争の記憶とする。

冷戦終結後、加害責任や植民地責任をめぐる論争が過熱した。「従軍慰安婦問題」について 1992 年、1993 年と自民党政府は調査のうえに謝罪した。95 年に侵略戦争を謝罪する村山富市首相の談話に、自民党世襲議員が対抗して歴史認識や歴史教科書問題と、政局が結びつくといった論争も起こった<sup>2)</sup>。

そして「子どもの戦争の記憶」までもが、論争の対象になった。戦後 50 年をすぎ、1997 年に刊行された妹尾河童『少年 H』<sup>3)</sup>は 172 万部とベストセラーになり、TV ドラマ化され、教科書にも記載された。『少年 H』は、1930 年生まれの妹尾河童による、終戦を 15 歳の少年時代に迎えた戦争体験

\* 社会学研究科博士後期課程

の小説である。『少年 H』は、「子どもの時代の戦争の記憶」の小説として読まれている。『少年 H』は新聞だけでなく、様々な雑誌で取り上げられて話題を呼んだ。

少国民研究の第一人者で児童作家である山中恒（1931 年生まれ）は、『少年 H』は大量の歴史的齟齬や史実の誤認があるとして、山中恒・山中典子共著『間違いだらけの少年 H』（1999）<sup>4)</sup>で批判した。

戦争と子どもについては、話題を呼んだ作品として、野坂昭如『火垂るの墓』<sup>5)</sup>（1967）やその映画化作品（1988）、中沢啓治『はだしのゲン』（1975）高木敏子『ガラスのうさぎ』（1977）など、さまざまに扱われてきた。しかし、このような論争になったのは、『少年 H』が初めてである。

この 1930 年代生まれ世代は、戦争で傷をうけていても、社会的言語を持たず、内心の自由が奪われていた。戦争体験の苛酷さを語るという土俵に乗れば、自分たちが年長者より劣った地位に立たざる負えないジレンマを抱えていた。戦後 50 年を過ぎ、戦場体験を語る年長者がいなくなりはじめ戦争体験を語る表舞台に立った。

戦争体験を語る表舞台にたったということは、戦争の記憶の継承という役割をも担っていた。妹尾は『少年 H』において、『少年 H』の大量の史実誤認や歴史的齟齬を批判した山中恒も、戦争の記憶の継承という役割と責任を強調していた。

では、なぜ「子どもの戦争の記憶」が論争を引き起こしたのか、そこでは、いかなる議論が展開されたのかを明らかにする。この問いを明らかにすることによって、1930 年代生まれ世代の「子どもの戦争の記憶」が、戦後 50 年以降の日本社会においてどう扱われたのかを検証していく。

## 先行研究の整理

「子どもの戦争の記憶」研究の重要性を示唆しているのは、鶴見俊輔『戦時日本精神史』（2001）である。鶴見は「戦争中に大人として生きた先行世代の日本人が敗戦と降伏と外国軍隊による占領によって、どのように転向していったかを、子どもの目でしっかりと見届けたということが、戦争についての新しい意識が現れた原因の一つ」<sup>6)</sup>としている。

戦後の日本人の戦争観の主要な研究として、以下の研究がある。終戦をこの時期迎えた 1930 年代世代については、小熊英二『民主と愛国』（2002）で明確に分析されている。この世代の戦争の記憶が、日本人の戦争観にどのように影響を与えたかが、知識人の戦争観を中心に詳細に検討されている。

吉田裕『日本人の戦争観』（1995）<sup>7)</sup>は、戦後の歴史的背景をふまえ、日本人の戦争観の全容を解明し、戦後 50 年の戦争観の変容を明らかにしている。日本人の戦争観は第一に軍隊や戦争に対する強い忌避感と、第二に平和主義的な意識が被害者の色合いの濃い戦争観と表裏一体の関係にあったとしている。それは経済主義的な戦争観といったものに転化する。第三に国際環境の変化に直接連動する形で従来の戦争観の見直しが図られる。対外的必要に応じる形で過去の戦争の読み替えが行われる。このことは日本人の戦争観に独特の歪みをもたらすとして、吉田は自国民の戦争観の歪みを冷静に検証することが必要と主張している。

小熊、吉田の戦争観の研究の到達をふまえ、課題としては戦後 50 年以降の日本人の戦争観の変容に「子どもの戦争の記憶」がどう位置づけられるかである。吉田の指摘する戦争観の歪みを『少年 H』論争を分析することによって、検証していくことである。

「子どもの戦争の記憶」の論争がなぜおきたのか、その論争によって、戦後 50 年以降の日本社会において、この世代の「子どもの戦争の記憶」がどう扱われてきたのか、日本人の戦争観に何をもたらしたのかを検証していく

ことが本稿の目的である。

## 1 章 論争はなぜおこったのか

### 1 節 山中恒のこだわったきっかけ

1 節では、山中典子共著『間違いだらけの少年 H ～銃後生活史の研究と手引き』（1999）における言説から、『少年 H』への批判にこだわったきっかけを明らかにする。

ここで『少年 H』のあらすじを述べておく。神戸の海辺の町に「H」と呼ばれた少年がいた。父親は洋服の仕立て職人、母親は熱心なクリスチャン。2歳下の妹がいた。Hが小学5年生の時、戦争がはじまった。父親がスパイ容疑で逮捕され、近所のお兄ちゃんも収集を逃れて自殺する。上巻、下巻とHが中学生になった戦後まで、空襲、飢え、暮らしの過酷さと経験する。「戦争を子どもの視点で描いた感動の超ベストセラー」と本の裏表紙に書かれている。

1997年に刊行し172万部売れてベストセラーになった妹尾河童『少年 H』の推薦文は上巻の本の帯に、「『大人も新聞もウソつきや』愛と笑いと勇気のお話、著者初の書き下ろし長編小説。この『少年 H』は後々の世に残る一冊である」（立花隆）「逞しく繊細な『少年 H』に会わせたい」（澤地久枝）、「いやはや面白かった。痛快活躍大ロマン小説である」（椎名誠）は記載された。下巻の帯には、「『この戦争はなんなんや？』好奇心と正義感が人一倍旺盛な『少年 H』と変わったその家族が巻き起こす愛と感動のお話。」と記載されている。

この「大人も新聞もウソつき」と「この戦争はなんなんや」と戦時下において、少年 H が戦争への疑問を発している姿は、山中が軍国少年であった少国民の姿と真逆の存在となった。

少国民研究第一人者で児童作家である山中恒によって、大量の歴史的齟齬

や史実の誤認があると山中恒・山中典子『間違いだらけの少年 H』1999で批判された。

山中の戦争期の子どもと児童文学に対しての不満は、『少年 H』が初めてではなかったが、山中恒が『少年 H』に違和感を覚えたのは読む前の先入観ではなく、読み始めてからであった。戦争期に子どもだった人たちがその体験を語るには戦争が終わってから一定の年数が必要だったとしていた。山中はそれらの表現に対する一定の不満というか、物足りなさをもっていた。

1981年、村田栄一との対談で、山中の戦争期の子どもと児童文学に対しての不満が語られていた<sup>8)</sup>。『少年 H』批判は『間違いだらけの少年 H』にはじまって、山中恒・山中典子『書かれなかった戦争論』(2000)、山中恒・山中典子『少年 Hの盲点 忘れられた戦時史』(2001)と続いた。

『少年 H』批判にとどまらず、山中は『新聞は戦争を美化せよ！戦時国家情報機構史』(小学館, 2001年) 山中典子共著『あたらしい戦争ってなんだろう？』(2003)『すっきりわかる「靖国神社」問題』(2003)と刊行した。批判をはじめたきっかけやこれらの著書を記した理由が『間違いだらけの少年 H』に述べられている。

山中は、たまたまテレビ朝日の「徹子の部屋」に著者(妹尾河童)が出演しているのを見て、妹尾の証言をきく。妹尾は次のように語った。「戦時中の体験の記憶を封印していたのだが、この度この本を書くにあたって、あの時代の記憶の封印をといたと記憶が冷凍食品が解凍されようであった。新鮮なままにつきからつきへと出てきたし原稿を書くたびに友人たちとファクスで連絡を取り、事実関係を確かめたので絶対に間違いはない」と証言する妹尾であった。

妹尾は若い人たちは「戦争時代の話」というだけで、どうしても引いてしまうようなものが多かったので、若い人たちにも面白がって読んでもらえるようなものにしたいと構成を考え、工夫したという。妹尾の意見には山中も心から賛意を覚える。ところが腰をすえて読み始めて間もなく、山中はなん

とも名状しがたい困惑にとりつかれて、途方にくれてしまったと述べている。

待ち望んでようやく食べ始めた料理に、たちの悪い異物が混入しているような、ひどい違和感を覚えて、私は思わず「なんだこりゃ！」とさげんでしまった。というのはあの戦争時代の、その時期には絶対あり得ないようなことが、事実あったように書かれているのである。<sup>9)</sup>

山中が『少年 H』を批判するきっかけとなったのは、『少年 H』に疑問を呈した雑誌が一回で立ち消えになったことと間接的にきいた妹尾河童の反応だった。しかも妹尾にやきもちを妬いているという山中にとって、愉快でない噂をきいたことも山中を大きく動かした。

雑誌『創』<sup>10)</sup>で「児童文学賞選考会で噴出した妹尾河童『少年 H』への疑問」では妹尾河童『少年 H』が150万部を超えミリオンセラーとなっていることや、太平洋戦争期を生きた少年の素朴な目で綴った記録として高く評価されていることを紹介した。その後『少年 H』は、あまりにも事実関係、歴史考証がずさんであるとの声が出始め、今年度の小学館児童文化賞と講談社野間児童文芸賞に『少年 H』は、ノミネートされ、選考委員の多数はイチオシしていたが、一部の選考委員から異論が出され、結局、受賞できなかったことが掲載された。

雑誌『噂の真相』<sup>11)</sup>では「妹尾河童のベストセラー『少年 H』に史実誤認として、山中恒が史実の間違いを指摘し波紋し、講談社の対応も気になるところである。当時の新聞や資料を網羅し、十分に裏をとってから書いたという妹尾自身は、今回の件をどう受け止めているのか」と掲載された。

ノミネートからはずされたという話は初耳です。でも今までに指摘のあった事実誤認については、増刷の際に直しているし、逆にまだ間違い

があるなら教えてほしいぐらい。<sup>12)</sup>

山中はこの記事が二誌に掲載されたあと、なんらかの反応があるかと思っただが、そんなものはまったくなかったと述べている。追加取材に来てくれた『噂の真相』は、すでに話題性が古くなったのか、それとも一ページ程度にまとめられる材料ではないと判断したか、結局は取り上げないことになったという連絡をうけた山中だった。

追加取材にきた記者にきくと

「妹尾さんから、そんな重箱の隅をつつくような指摘など問題ではないといわれた。」私は冷静に考えた。多分そのようにいって、私の指摘を黙殺しなければ、この物語のかなりの部分のエピソードが成立しなくなるのだから、無理もないなと思った。<sup>13)</sup>

だが、それから間もなく、山中はあまり愉快ではない噂を耳にすることになる。つまり山中は自分の少国民時代のことを書いた本が売れなかったので、同じく少国民時代のことを書いてベストセラーになった『少年H』にやきもちを妬いて、些細な間違いをおおげさに言い立てケチをつけただけなのだというものであった。また山中ががんばりさえしなければ『少年H』は賞を総なめにできたのにという怨嗟の声があるらしいことも知った。そこで山中は誤解をとくためには、自分で釈明するよりしかたがないと異議申し立てが些細なことであるかどうか、異議申し立ての内容を明らかにする必要があると宣言する。

これは『少年H』にクレームをつけるための作業ではない。『少年H』論に仮託して改めて昭和史の問題点を探り、戦後生まれの世代の読者やジャーナリスト、教師の方々ばかりでなく、これから自分史を執筆しよ

うという戦中派もふくめて、歴史資料の重要性や歴史が生きたナマものであることを理解していただくための作業なのである。<sup>14)</sup>

山中は歴史資料の重要性や歴史が生きたナマものであることにこだわっていた。これは以前から戦争を題材にした児童文学にたいして物足りなさを感じていたので、15年戦争についてのナマの資料がないことに驚き、戦争当時の出版物を集め、少国民シリーズを完成させた。山中のこだわりについては、山中と鶴見との対談で鶴見は述べている。

鶴見 山中さんはその配慮をやってないから逆に強いんだ。復刻一本でブルドウザーのようにおしている。これでもかこれでもかというふうになっていく。そのために山中さんの解釈にからめて、ねじまげた引用がしにくくなる。<sup>15)</sup>

若い人たちに押し付けがましくなく、面白がって読んでもらうように工夫したという妹尾に、山中は、自分も同様の主張をしてきたと、当初は妹尾には心から賛意を表したと述べていた。しかし1981年の鶴見との対談では、面白がって読んでもらうことではなくてナマの資料を苦勞して若い人に読んでもらいたいと述べている。少国民研究と同様に1999年『間違いだらけの少年H』では、このナマの資料にこだわるやり方は変わらなかった。

成田龍一も「山中は膨大な資料を提示してみせる。文献を提示し、そこに「真実」を見出し、記述の「誤」を正していくというオーソドックスな方法にもとづく批判である」<sup>16)</sup>と述べている。

このように山中が批判をはじめのきっかけは、妹尾への批判が山中のやきもちや重箱の隅をつつくといった山中にとって不本意な言及だけでなかった。『少年H』に出会う前からの戦争と子どもの文学への不満から、2万点は下らないという資料収集と9年間をついやして完結した『ボクラ少国民』<sup>17)</sup>

への自負もあった。

さらに1960年ごろから戦争期の子どもと児童文学に対する不満は、それら表現に対す一定の不満という物足りなさをもっていた。これらの物足りなさは、従軍兵士の戦争体験に比べると当然であった。戦争期に社会的言語をもたなかった1930年代生まれの世代が、戦争体験を語るには年長者の戦争体験と比べて劣った地位に立たざる負えないジレンマを抱えていた<sup>18)</sup>。1931年生まれの山中は、こういったジレンマに打ち勝つべく『ボクラ少国民』に2万点の資料収集と9年間を費やした。

山中は『間違いだらけの少年H』を刊行して「実はやっている、これほど楽しい作業はなかった」とあとがきで述べている。山中は、この作業をミステリーの謎解きと称し『少年H』の作者の発想起点や何を根拠にしたのか、なぜこうした過誤を犯したのか、記事改ざん操作などを逐一解明していく作業としている。山中が楽しい作業としたのは、山中典子との共同作業をもさしていた。山中典子は資料秘書を務めていた戦後生まれ（1949年）の再婚相手であった。

山中は、1980年先妻静江<sup>19)</sup>を病気で亡くしていた。山中は自らを「少国民H」として自分の体験と部分的に重ね合わせて容認した部分を「戦後派N」の典子が疑問をもち、新たに史料の解説を書き加えたり、山中も自説を撤回したこともあった<sup>20)</sup>。山中も当初はこれほどの大部な本になるとは夢にも思わなかった。

もう、こうなると私どもは『少年H』の作者に感謝こそすれ、敵意など持たなくなった。それと『少年H』が話題になり、172万部も売れたのも神の配慮なら、私どもに、こんな楽しく興奮する仕事をさせてくれたのも神の配慮なのかもしれないと思うようになった。<sup>21)</sup>

『少年H』批判をはじめから山中の「私ども」は山中典子を指していた。

その後刊行された山中典子共著『書かれなかった戦争論(2000)のあとがきでは、『少年H』への言及がまったくなかった。

## 2 節 過熱していく批判

ところが、その1年後の山中典子共著『少年Hの盲点 忘れられた戦時史』(2001)では、批判がより激しさを増していった。その前の『書かれなかった戦争論』(2000)では、妹尾氏を批判しつつも妹尾を信じる多くの人を擁護する言及もあった。その理由として戦争の語りがたさや受け入れにくさをあげていた。

新聞雑誌、放送、講演で「本当の本当の話」とあの戦争を体験した本人が正々堂々と繰り返し証言している以上、誰だってその作品が全く歴史事実に戻すものだとは思わず、無理もないと捉えていた。戦後多くの日本人が、あの戦争についてきちんと史実に基づいて考えてみる余裕がなかったし、当時の中国と日本の政治経済の関係や日本の国策を推進して、政治機構について考察してみようとする人もおらずとしている。

そのために一般的には、戦後の価値観やパターン化した歴史観で、日本は愚かな戦争をし、愚かな国民はそれに協力したのだということで、単純に片づけてしまい、どうしてそんな戦争を始めてしまったのかと、あえてあの時代へ立ち戻って考えてみるというようなことは、とてもうっとうしいことだと思われてしまったのかもしれないと山中は分析した<sup>22)</sup>。

また、この『書かれなかった戦争論』のあとがきでは、山中自身の歴史認識について大きく見直しをせまられることにショックを受けていると述べている。

「それはお前の歴史の学び方が悪かったのだ」といわれれば。」それまでのことですが、目から鱗が落ちるといよりは、いきなり行先不明の迷路に追い込まれたようなよるべない気分させられてしまいまし

た。<sup>23)</sup>

この『書かれなかった戦争論』では一次資料をつかひながら対中国戦争の歴史について解説している。山中は「故無き中国人差別を根底として、日本があつた戦争でアジア諸国にどれだけ迷惑と被害を及ぼしたかに思いをいたし、あの戦争の交戦国の多くの犠牲者の悲しみを心からの悼みとして、胸に刻むべきだと思います。」と本論の最後に述べている<sup>24)</sup>。しかもこの著書のあとがきでは『少年H』への言及が全くなかつた。

つまり、山中は戦争中に生まれ育つた日本人として歴史の学び方を問われる事態に向き合うことになつたとしているが、戦争に対しての悔いや関与した少国民としての存在を問うものとしてうけとめていた。

また、山中は死ぬまでに中国にあこがれてゐた父から軍とのかかわりについて聞けなかつたことを悔やんでゐた。山中の父は1961年に交通事故で亡くなつた。なぜ父が死ぬまで中国への思いがあつたのか、中国との戦争に深い関心を寄せたくなるのも当時の父を知る人もなく聞けないという深い悔いからきてゐた<sup>25)</sup>。この著書では山中自身の戦争観へのふりかえりや反省が記されてゐた。しかし後の著書では、『少年H』批判は激しさを増して行く。

山中恒・山中典子『「少年H」の盲点 忘れられた戦時史』(2001)では冒頭で『少年H』批判がより扇情的な表現となつてゐる。『少年H』ほど数多くの問題を提起してくれた本はないとしたうえで『少年H』への批判は激しさを増した。『週刊新潮』1999年6月27日号で妹尾から『「少年H」からの手紙』と掲載されてゐる。

山中恒さんと山中典子さんご夫妻が書かれた『間違ひだらけの少年H』は845項もある本だったので、読むのに3日かかりました。この本を書くために注がれた情熱とエネルギーにはただただ頭が下がりました。『「少年H」に「間違つた記述が多い」と言われたことに異議を申しませ

んし、事実誤認を指摘された部分でナルホドと思う所は「たしかに間違っていました」と率直に認めさせていただきます<sup>26)</sup>。

山中は、反論にも言い訳にもならない一文だと評している。

指摘で納得できないものもありましたが、山中さんの本で多くのことを学び、勉強不足も反省しました。でも山中さんが望まれるように細大漏らさず資料を網羅しながら小説を書くことは、僕には、とても無理だったと思います。「では書くな!」と言われるかもしれませんが、僕に限らず、あの戦争を体験した人は今のうちに何とかして自分が体験をした周辺のことを臆せずに書き残してほしいと思います。山中さんには、腹立たしい間違いだらけの少年Hだったかもしれません。でも僕なりに戦争の時代を伝えるために工夫して書いたつもりです。反戦を前面に押し出したり、資料を読まされるような感じになるのをつとめて避けようと思いました。若い人たちに敬遠されると何も伝わらないからです。僕は戦争とは何なのかということを知らない世代に手渡したくて『少年H』を書いたのです。

山中はこの妹尾の言葉を質の悪い開き直りと評している。たっぷり宣伝広告費をかけた一般出版物である『少年H』と自分史の自費出版や私的刊行物と同次元に並べて論じようとしているとし、妹尾は自分のあやまりを正当化しているとみている。

常識的な歴史観から外されたか、除外されたかして戦時史の盲点となってしまうところを見事に衝いた。盲点から盲点へと、歪曲された怪しい筋立てで綴り合わせた、珍しい物語<sup>27)</sup>

実に見事に観客を欺く抜群の技術を持ったマジック<sup>28)</sup>

なぜ、「欺く」という表現を使い激しさを増したのか。『少年H』の批判に対するマスコミの反応のなさに山中の怒りやジレンマが増していた。しかし、マスコミの反応はまるでなかったわけではなかった。『間違いだらけの少年H』も新聞、雑誌の書評やコラムで取り上げられ、845ページ、定価5600円の研究書としては「異例の売れ行き」と（出版社側）としている<sup>29)</sup>が、山中の望んでいた世間の反応には実際届かなかった。また、著名な文化人や知識人の推薦や解説も山中の怒りを煽り立てた。

私どもがどれほど『少年H』の歴史的事実の誤認と浅薄な歴史観による戦時史の矮小化を指摘して批判しても、ほとんどマスコミに無視され、『少年H』は破竹の勢いで売れ続け、舞台化され、テレビ・ドラマ化され、文庫化され、今や「平成の名作」として、採択を待つ来年度中学国語2年生用の教科書（三省堂版）にも登場。一般の人たちは、教科書に対する権威観が根強くあるので、私どもの批判など益々一顧もされなくなるだろう。<sup>30)</sup>

『間違いだらけの少年H』の見本ができた段階で取材を申し入れてきたのが『週刊新潮』（1999年6月3日）であった。『週刊新潮』での妹尾の弁解や謝罪の言葉も、山中からすれば「たちの悪い開き直りに徹している」とうけとることしかできなかった。このように、メディアとの相互作用によって、山中の批判は過熱していったのであった。山中に対するメディアの反応が、山中の求めているほど反響や反応が得られなかったことも、論争を劇化させた要因として大きくあげられる。山中の3冊の著書を通して、『少年H』への言及が激しく変遷していった過程があり、メディアの反応が彼を大きく揺り動かしていったのである。

山中の『少年H』批判は、2013年の『少年H』の映画化の際にはみられなかった。しかし論争についての言及は、岩崎稔(2006)、菅本康之「日本はどこで戦争をしたのか」(2008)、喜安朗、成田龍一、岩崎稔『立ちすくむ歴史』(2012)、斎藤美奈子「翼賛的な解説(群)は逆に危ない」(2016)と続いていた。

なぜ論争はおきたのかは、言説から焦点化されたことを大別すると二つある。一つは山中の内面であり、二つ目はジャンル問題である。一つ目は山中の内面に、大きく起因しているということが、何人からか言及された。

### 3節 山中の自分自身への苛立ち

論争がはじまった12年後の2012年に『たちすくむ歴史』<sup>31)</sup>における喜安朗と岩崎稔との対談で、成田龍一は、山中がなんでこれだけの批判の念をもったのか、「異様な執念」として喜安に問いかけている。喜安は、妹尾の小説は過去と現在とを緊張感を持って対置していない、読まれた理由が分からないと批判しつつも、山中の年譜的な事実でもってつきつめていく批判は、ちょっと参ったと感想を述べている。成田は山中の異様な執念がなぜ出てくるのかということも、歴史意識を考える上では立ち止まって考える必要があるとしている。

山中の内面について成田は「異様な執着心」、喜安は「自分への苛立ち」、菅本は「なぜこれほどまでに執拗に妹尾河童をおいまわすのか」と疑問を投げかけている。また成田は、山中の「ボクラ少国民」シリーズは、なぜ軍国少年であった自分が作られてしまったのかということに対するいわば怨念の書であり、そのことを実証するために戦後歴史学<sup>32)</sup>と同じ手法を取っていると述べている。

鶴見俊輔は、『文章心得帖』<sup>33)</sup>で1980年に「山中自身の戦後の進歩的な文化団体というものにたいする不信の念と、戦後の進歩的思想というものは結局やらせだという考え方と原体験が、現在を解釈するカギとして働いてい

る」と分析している<sup>34)</sup>。山中恒には、「こうした戦争中の原体験があって、そこからいま起こっている様々なことにたいする恨み、ことに課題図書にたいする恨みがでてきている」としている。

さらに、山中には原体験からつくられた戦後の進歩的な文化団体というものに対する不信の念があり、戦後の進歩的思想というものは結局やらせだ、という考え方があった。山中の恨みは戦時下の教育にもあったが、戦後の指導者としての大人の姿は、許すことができない深い恨みを積み重ねた。「思想善導してきた大人たちが、敗戦になり、そのころ自分たちがやってきたことに対して、決定的な責任をとることもなく、相変わらず、それぞれの分野で指導者の位置に居すわりつづけ、現在なお、自信たっぷりに、教育やら思想善導やらを続けている」ということである<sup>35)</sup>。

山中の恨みは大人に対してだけでなかった。大人を責めることができなかった自分たちにも向けられた。そして大人を責めることのできない自分たちにした大人に対して、恨みはさらに増幅した。喜安・成田が指摘した山中の「自分への苛立ち」はここからきていた。

ぼくらは敗戦のときおとなたちのこの鮮やかな変わり身の早さにおどろくだけで、ついに彼等を責めることができなかった。責めるなど思いもつかなかった。それはそれまでぼくらが受けた教育が、ぼくらの魂から自由という概念を完全に抹殺していたからであった。<sup>36)</sup>

論争を突き動かしつづけたものは、山中の戦後の変わり身の鮮やかな大人たちが責任を、とることをしなかった恨みからきていた。

一方、菅本康之は、山中が何故、これほどまでに執拗に『少年H』ならびに妹尾河童の批判を展開してきたのだろうかという点で、菅本は山中の育った環境<sup>37)</sup>に、この謎を解く鍵があるとしている<sup>38)</sup>。

『少年 H』の「三つの宝」の章での H の妹好子は内斜視で左側が内側によっていたために、上級生から「ヒンガラメ」と言って妹をからかうのに腹を立て、猛然と突っかかっていくが多数に無勢でうちのめされる場面がでてくる。この章は彼にとってとても気の重いエピソードという。彼にもいじめられていた妹がいたが H のように猛然と突っかかっては行けず、いじめられている妹を置き去りにして逃げだした経験があるだけでなく、妹のせいで自分までいじめられるために妹を憎いとさえ思ったと告白しているのである。<sup>39)</sup>

山中は『間違いだらけの少年 H』で妹にたいするエピソードを告白し、H をほめている。

じつは、この章は私にとって、ひどく気の重いエピソードだった。はっきりいって、ここでは H に脱帽せざるをえないのである。<sup>40)</sup>

それだけに、私はこのエピソードを読んで、H はえらいと思ったのである。だから、このエピソードだけは、ぜひともほんとうのことであってほしいと本心から願っている。<sup>41)</sup>

菅本は、徹底的に『少年 H』を批判し続ける直接の動機は、山中とその父親の関係に由来するとしている。山中は、『少年 H』の父盛夫に親近感を抱いていた。「誠実で実直、寡黙で仕事一途な職人」という好ましい人物である盛夫が『少年 H』において、山中の観点からすれば『オッチョコチョイのお調子者』のように書かれていることや、作者による史実誤認の関係で、この時期、知る術さえもなかったようなことさえ知っていた人物として描かれウソに加担する結果になってしまったことで、山中は毀損されたような不快な気持ちを抱いただろう」としている<sup>42)</sup>。

戦中、戦後の大人への怒りや恨みと父や妹に対する山中自身の悔いは、同

じ世代で同じ家族構成であった妹尾に対しても近親憎悪といえるほど怒りが向けられたのだった。

#### 4 節 ジャンル問題

成田・喜安との対談で岩崎は、「山中恒の批判を受けたのは、妹尾河童イコール少年Hの振舞い方もまったく感心しない。最初は適当に自伝であると言っておきながら、それが通用しなくなると小説という面を強く出すという意味では、場当たりの言い逃れでしかない」と述べている<sup>43)</sup>。しかし、妹尾は、『少年H』を1997年1月に刊行してから、ことごとく立花隆に小説として書くことをすすめられたエピソードを紹介している。

小説という形をとったのは立花さんが自分のことを書くのを照れないためにと、エッセイでなく小説として書くことを勧めてくれたから。「これは小説だから」と言いながら、本当のことを書けばいいんだからって。それは正解だった。今までは文章で書けないことをイラストで、イラストで書けないことを文章で書いていたけど、小説はすべてを自在に表現できる。<sup>44)</sup>

97年1月刊行後、小説としながらも妹尾は、雑誌の対談で語る中「事実が小説よりも奇なり」と次第に事実が強調される<sup>45)</sup>。

『書いてあることは本当の話なんですか?』とよく聞かれるんですが、ホントなんです。事実は小説より奇なりといいますが、あの時代は今の人にはしんじられなくらいヘンだった。だから、あの時代を伝えるには事実を書いた方が面白い。<sup>46)</sup>

山中は、『少年H』のジャンルの設定を「ノンフィクション」としての基

準にあわないと述べている。妹尾自身がすべて自分の記憶で書いたと主張するだけで、その根拠となった証拠物件の文書を一切提示しないから、「フィクション」としている<sup>47)</sup>。

『少年 H』の単行本を編集した市田厚志氏は「妹尾さんの『実際に見た』という言葉を広大解釈してノンフィクションだととらえている人がいるが、あくまで小説です。史実は大切だが、物語として当時の雰囲気伝えることを重視しました」と説明している<sup>48)</sup>。

山中恒氏は反論する。「ノンフィクションではないというのなら、重版で訂正する必要はないでしょう。そもそもあそこまで史実が変わっているのなら小説としても成立しませんが」もっともである。<sup>49)</sup>

菅本は、「妹尾河童自身のなかに『フィクション』より『ノンフィクション』の方が、価値があるとする素朴な幻想があり、『フィクション』の機構を侮っていることであることが問題」としている。「さらに（Hはテキストのなかで「天皇」批判をしているにもかかわらず）少年 H につながる大きな問題が潜んでいるのは『15年戦争』を排除し抑圧していることにある」としている<sup>50)</sup>。

「自分たちが『被害者』であると考えている戦争は日本が引き起こしたものであることをわすれてはならない。『少年 H』が大ベストセラーとなった背景には少なからず、自分たちが『加害者』であったという事実を忘れたい被害者としてのテキストを読みたいという『政治的無意識』が働いているといえる」と述べている<sup>51)</sup>。

読んでいて、不快感を伴わないことが『少年 H』が、これほどまでに売れた最大の理由であるとしている。つまり『少年 H』は、「『日本は戦争の被害者である』という考え方を広めるために道具になってしまったに過ぎず、アジアにおける『加害責任』の『忘却』を強化し補完する役割をしていること

は否めない」としている<sup>52)</sup>。

フィクションかノンフィクションかというジャンル問題にとどまらず、妹尾の戦争観と、戦後日本の戦争観が問われる問題と指摘されている。しかし、このジャンル問題の議論は継続しなかった。

## 2章 論争において「子どもの戦争の記憶」はどう語られたのか

### 1節 戦争の真実を語っているかどうか

『少年H』論争において、「子どもの戦争の記憶」についての議論の的になったのは、『少年H』の「子どもの戦争の記憶」は戦争の真実を語っているかどうかであった。その理由は二つあげられる。一つ目は、大量の歴史的齟齬や史実誤認が批判された『少年H』は戦争の真実を語っていないのではという点であった。二つ目は、日中戦争に関する記述がなく、妹尾河童の戦争観が問われた。

戦争の真実を語っているかどうかの批判や指摘は、次の世代に戦争を継承していく役割が、この1930年代生まれの「子どもの戦争の記憶」に託されていることを意味する。妹尾は、この役割を意識することによって『少年H』を書いていった。戦後50年は、戦中派である年長者が年老いてなくなり、この1930年代世代の「子どもの戦争の記憶」が、戦争体験の語りの主役となった。

斎藤美奈子は2002年『週刊朝日』で『少年H』を戦後の論理で書かれた嘘臭い戦争観と言及し、山中の小説『青春は疑う』（1967）を戦争の真実が表現された小説として高く評価している<sup>53)</sup>。斎藤は『少年H』は嘘臭い戦争観とし、山中恒の『青春は疑う』（1967）は戦争の真実が表現されたものとしている。斎藤は、山中の初版から35年目の復刻版である『青春は疑う』を、「当時の軍国少年の心情と終戦を迎え、『民主主義』という言葉と格闘するさまを戦争の真実を描いた面白い本」として評価している<sup>54)</sup>。その上で

『少年 H』と比較している。

敗戦を知り、負けたのは〈ほくら巨民の力が足りなかったからだ〉〈ほくらは天皇にお詫びするために腹を切るべきなのだ〉とまで思い詰める透少年の痛々しい心情吐露は戦後の論理で書かれた『少年 H』のお利口さんばいが嘘臭い戦争観の対極にあるものだ。が、戦争の真実はおそらく透少年のほうにある。<sup>55)</sup>

山中恒『青春は疑う』は、1967年9月に、三一書房の《高校生新書》の一冊として刊行されたものであり、戦後の大人たちの教育の姿に抗議する姿も書かれていた。しかし、戦中戦後の大人たちの暴力や、少年たちの怒りや苦しさについての議論は起こらなかった。

斎藤は、山中の『間違いだらけの少年 H』を単なる批判を超えた第1級のノンフィクションと評している<sup>56)</sup>。「『少年 H』に疑問をもった読者も本当はいたのではないかと思っていたが、それは報道されず、読者から学校関係者まで、みんなが『右へならえ』で激賞し、なんとなく公言しにくかっただけ。思えばそれも戦時中の言論状況に似ていなかっただろうか」<sup>57)</sup>と指摘している。想定した戦時中の言論状況と比較して、危機感を述べている。しかし斎藤は1956年生まれで、戦後11年に生まれている。斎藤の想定した戦時中の言論状況は何によるものであるのかは確定していない。

一方、妹尾は「少年の目から見た”ほんとうの戦争”を現在進行形で書きたかった」<sup>58)</sup>と少年の目にこだわった。妹尾は、「思い出話じゃなく、体験を現在進行形みたいな形で書けば、若者も拒否感なく読めるだろうと思って、だから少年 H が見たもの、聞いたこと、感じたこと、食べたもの以外は書かなかった。」と述べている<sup>59)</sup>。

しかし、妹尾と山中の両者に共通した戦後の少年たちが苦しんだ飢えや戦中、戦後の大人からの暴力についての議論はおこらなかった。この内部暴力

は、語られなかった「子どもの戦争の記憶」であった。特に、大人から年少者への暴力は、議論の対象にもならなかった。たとえ空襲にあったり、兵士の体験がないにせよ、この 1930 年生まれ世代がうけた内部暴力は、戦争の被害体験といえるのではないだろうか。

## 2 節 新聞や保守系雑誌でも山中恒の批判は取り上げられた

『朝日新聞<sup>60)</sup>』の書評で斎藤美奈子は、『間違いだらけの少年 H』は単なる批判を超えた第 1 級のノンフィクションと評価した。『毎日新聞<sup>61)</sup>』では、山中夫妻の共著『書かれなかった戦争論』についてのインタビューが記事になった。『読売新聞<sup>62)</sup>』では論争の背景として、消えゆく戦争の記憶を伝え残したいとの思いもろいといっていると述べている。

「山中は反響の大きさに『少年 H』のどの部分が指摘で改訂されたのかをまとめた小冊子「論叢」を 600 部出版、関係者や読者に配布した。妹尾側にも声が寄せられたことがあった。「回覧板は妹尾さんが書いたように当時からあった」「妹尾さんの避難訓練の記述は正しい」などの声を紹介している。

妹尾の担当編集者は「少年 H で書かれているのは、いくつもある歴史の一つ、記述が違っていた部分もあったが、それで戦争体験を語り継ぐという作品の意義が失われるわけではない」と述べている。戦時中の少年時代を作品に書いた作家の早乙女勝元「小説とはいえ、事実と違うのは問題で、この点は山中さんと同感。しかし戦争体験者が高齢化し、事実を知っている人が減っているだけに、当時の正確な記述が難しくなっているという一面もある」と話している。

野間児童文学芸賞は講談社の財団法人野間奉公会が主宰する賞で、その選考会で山中は気が重くなりながら、『少年 H』が大量の歴史的齟齬を含んだものであることを指摘した<sup>63)</sup>。

これを取り上げたのは、「児童文学賞選考委員会で噴出した妹尾河童『少年 H』への疑問」（『創』1998 年 1 月）と「妹尾河童のベストセラー『少年

H』に史実誤認」(『噂の真相』1998年1月)であった。この2誌はこの記事で終わり、これ以上は取り上げなかった。その後山中は、『間違いだらけの少年H』を刊行した。

その後、すぐに記事にしたのは『週刊新潮』(1999)の「変な噂 悪い噂」[間違いだらけという妹尾河童さん『少年H』]<sup>64)</sup>であった。山中と妹尾の主張をそれぞれ記載があったが『噂の真相』と共通していたのは、妹尾側の主張を最後にもっていったことだった。『噂の真相』は今後の妹尾の作品に期待をよせているコメントを載せた。

それにしても子供たちに向けて描かれた作品が皮肉にも児童文学賞を否定されてしまうという結果になってしまったが、妹尾にはコメント通り今回の指摘を真摯に受け止めて、さらにいい作品を送り出してほしいものだ。<sup>65)</sup>

『週刊新潮』は妹尾の言い分を最後の文末に記載している<sup>66)</sup>。一方『サンデー毎日』(2000)は山中恒の主張として、「ノンフィクションでないというのなら重版で訂正する必要はないでしょう。そもそも、あそこまで史実が変わっているのなら小説としても成立しません」を文末に記載し、それにたいして、「もっともである」とフリーライターの尹雄大は念押ししている<sup>67)</sup>。

双方の主張にとどまらない言及をし、歴史観を否定したのは『諸君』[間違いだらけを指摘された『少年H』の危ない読まれかた](2000)であった。「『天皇』や『日本の軍部』が戦争の全責任者であったかのような薄っぺらな歴史観を広める役割を演じた。この虚構を批判したのが山中恒・典子共著『間違いだらけの少年H』によって暴露」としている<sup>68)</sup>。

『少年H』が読者への説明が一切なく訂正していることや推薦人たちの言葉も「仲間褒め」と評している。これらを文化人のオマージュとし歪められた歴史認識が横行する今を物語る「貴重な時代さらに指摘したのは『閉ざさ

れた言語空間』のもと GHQ 欽定史観が『少年 H』の歴史認識である」と言及している<sup>69)</sup>。

『少年 H』は戦時下での事実を語っているかどうかについては間違いがあったが、小説としての価値はあると認められ、戦争の真実を語っているかどうかは真っ向から否定はされなかった。また、雑誌には、日中戦争への記述がないことに対する言及は全くみられなかった。

以上のことから、真実か嘘かという二項対立の議論は、小説としての価値に置き換えられ継続して語られなくなった。これは『少年 H』を読んで得た感動が優先され、史的事実や状況に関する関心は後景化された。これは日本人の戦争観に、史的事実への関心よりも感動を優先するメンタリティをもたらしたといえるのではないだろうか。

### 3 節 戦争の真実かどうかではなく想起と記憶の抗争

岩崎稔は、この論争を想起と記憶の抗争という性格をもった対立としている。「妹尾は自分の記憶を語っているとしながら戦後に作られた戦時社会の枠組みによって自分の「想起」と「記憶」を組み立てているに過ぎないとして、事実問題を確認するために『昭和2万日の全記録5巻・一億の「新体制」』がおかしている誤りであることも山中から突き止められていた」が、妹尾がおかす叙述上の過ちは、岩崎自身もとてもすべて避ける自信はないとしている<sup>70)</sup>。

問題は「戦後に作られた戦時イメージは『少年 H』を強く拘束していることであり、その枠組みから当時を想起したと称する作業が行われていることである」としている。山中の「少国民」は大人以上に愛国的となり、大人たちを監視する役割さえはたした関与の記憶に満ちてその加害責任、関与責任が切実なものとして存在している。妹尾の『少年 H』が少国民責任を消去してしまうような想起は、山中にとって耐え難いものだったに違いないとしている。山中が指摘している妹尾の中国戦線についての叙述や言及が存在せ

ず、あくまでも敵は米英であることも、敗戦後に構成された枠組みにほかならないとしている<sup>71)</sup>。

岩崎は同じことは一般的に存在し、NHKの朝の連続テレビの近現代の一人女性の年代記での戦争の語りは加害の経験や帝国の経験は消去されているとしている。そうしたヒロインたちが描く歴史とは、横暴な軍部や偏狭な町内会の押し付けに苦吟するひとびとの姿であり、空襲と飢えの辛さであり、日本人のけなげでひたむきな物語である。そしてこの手の圧倒的な量の戦争の語りや、戦時の集合的記憶をどれほど規定し、あるいはついに自覚しえないほどにわたしたちの戦争表象にしみとおっていることか。岩崎は『少年H』の問題は、史実のまちがいだけでなく、不確かな記憶の領域にむきあうことの必要性をどう自覚するのかという課題をつきつけているとしている<sup>72)</sup>。不確かな記憶の領域とはここでは明記されていないが、1930年代生まれの「子どもの戦争の記憶」にも該当する。この「子どもの戦争の記憶」にどうむきあうのかか問われているのが『少年H』をめぐる論争である。

成田は、『少年H』をめぐる論争を2001年は山中は記憶の対置による出来事の解釈をめぐる抗争にも踏み込んでいると言及し、12年後に戦後歴史学の問題として捉えている。

『少年H』は山中の批判を受け、史実の間違いを訂正していった。しかし史実の間違いを訂正するだけではない問題があった。『少年H』は戦後に作られた戦時イメージに拘束されているという問題があることが、岩崎の指摘によって明らかになった。さらに私達が自覚し得ないほどこの手の圧倒的な量の語りや、戦争表象にしみわたっているということに、向き合うことが求められている。

## おわりに

戦後50年以降、なぜ論争になったのかを、山中のこだわったきっかけの

経過とより山中の批判が過熱していったことを明らかにした。その激しさから山中の恨みの背景についても、戦中、戦後の大人への不信感が大きくあり、そんな大人に抗えなかった自分への苛立ちがあったのではないかと分析してきた。さらに父や妹に対して家族への山中自身の悔いが、自分への苛立ちの背景となっている。またジャンル問題も論争の焦点となったが、妹尾の戦争観が日中戦争への言及がなく太平洋戦争で限定されていることも指摘されていた。

論争の背景として山中の内面に焦点を当て、分析したことによって、執着や恨みを可視化することができた。この可視化できたことによって、少国民世代の内心の自由が奪われたことの戦争の傷が断続的に継続されていることがうかがうことができた。

『少年H』をめぐる論争は、戦後50年以降、1930年代生まれ世代の不確かな領域である「子どもの戦争の記憶」にどうむきあうのかが問われた論争であった。論争において、戦争の真実が語られているのかという議論は、新聞や雑誌に掲載されたのは一定の期間で、継続してとりあげられなかった。当然人々の問題関心も遠ざかっていき、大衆文化レベルでは小説としての価値に置き換えられた。が研究者の間で議論は継続されていた。2006年岩崎稔は、想起と記憶の抗争として、成田龍一は、2001年山中は記憶の対置による出来事の解釈をめぐる抗争にもふみこんでいるとしていた。2012年は、戦後歴史学の問題と論争への視座も変遷してきた。

大衆文化レベルにおいて、「戦争の真実」よりも、小説としての価値におきかえられたということは、『少年H』を読んで得た感動が優先されたということの意味する。当然、史的事実や状況への関心は後景化された。

このことは、日本人の戦争観に、史的事実への関心よりも感動が優先されるメンタリティをもたらしたのではないだろうか。これは吉田裕が主張した冷静に検証する必要としている戦後50年の戦争観の歪みの一端を示している。

戦後 50 年以降、「子どもの戦争の記憶」までもが論争の対象になった。その背景として、少年少女期に終戦を迎えた世代が、戦争体験の継承者としての発言力を有し、その発言内容が問われたことがあった。そのことだけでなく、「子どもの戦争の記憶」を「感動の物語」として語ることの是非への問いも潜んでいた。「子どもの戦争の記憶」論争は、戦後 50 年以降の世代変化と、感動を求め、消費する欲望と抵抗感が混在しながら、生み出された論争であった。

## 註

- 1) 小熊英二『民主と愛国』新曜社、2002年、662頁。小熊英二は、この1930年代生まれ世代の特徴を、以下のように指摘している。「1つ目は、この世代は戦争で傷をうけてはいても、戦争体験の苛酷さを語るという土俵に乗れば、自分たちが年長者より劣った地位に立たざるをえないというジレンマを抱えていた。2つ目は、自分の体験を位置付ける社会的な言語を十分に備えていなかった少年少女たちは、より抽象的な、言葉にならない抑圧感として、戦争の圧力と死の恐怖をうけとった。そしてこの「少国民世代」の少年たちは、生まれたときから兵士として死ぬことを教育されていた。それは憧れと同時に恐怖であった。しかし死の恐怖は、表立って公言することはもちろん、自分自身の内心で認めることさえ禁じられていた。そのため彼らは、死の恐怖を無意識のなかに抑圧した。3つ目は、敗戦後の教育論を拘束していたものは、戦争によって刻印された行動様式であったので、こうした状況に苦しめられ、暴力をうけ辛い思いをし、「民主主義」の欺瞞と形骸化という印象をもった。疎開時の圧迫された状況と社会的言語をもたず、戦争の記憶を言語化できなかった。」
- 2) 岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編著『戦後日本スタディーズ 3』紀伊國屋書店、2008年、30～32頁。
- 3) 妹尾河童『少年 H』上下 講談社、1997年。
- 4) 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年 H』辺境社、1999年。
- 5) 野坂昭如『アメリカひじき 火垂るの墓』文藝春秋、1968年。
- 6) 鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』岩波書店、2001年、252頁。
- 7) 吉田裕『日本人の戦争観』岩波書店、1995年。
- 8) 山中恒『少国民体験をさぐる ボクラ少国民 補巻』辺境社、1981年、11頁。

山中「作中にあたかも〈反戦・平和主義者〉みたいな子どもが登場してくるのが気に食わなかったわけ。どう思い返してみても、オレたちのまわりにそんなガキはいなかった。オレたちはみんな先生のいうことをきいて天皇の兵士になりために頑張っ

- た・・という意識があるわけですね。それだけで違和感があって反発しちゃうわけ」
- 9) 山中恒『間違いだらけの少年H』辺境社、1999年、4項。
  - 10) 「情報の焦点 児童文学賞選考会で噴出した妹尾河童『少年H』への疑問※事実関係や歴史考証がざさんとの声「勝ち抜く僕ら少国民」の歌の年代など」『創』創出版、1998年1月。
  - 11) 「妹尾河童のベストセラー「少年H」に史実誤認」『噂の真相』噂の真相社、1998年1月、21-22頁。
  - 12) 「情報の焦点 児童文学賞選考会で噴出した妹尾河童『少年H』への疑問※事実関係や歴史考証がざさんとの声「勝ち抜く僕ら少国民」の歌の年代など」『創』創出版、1998年1月。
  - 13) 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年H』辺境社、1999年、13頁。
  - 14) 17と同上
  - 15) 鶴見俊輔・山中恒「ボクラ少国民は、その後どう育ったか」『少国民体験をさぐる』辺境社、1981年。81~104頁。
  - 16) 成田龍一『歴史学のスタイル』校倉書房、2001年、390頁。
  - 17) 山中恒『図説 戦争の中の子どもたち』河出書房新社、1989年、104頁。
  - 18) 小熊英二『民主と愛国』新曜社、2002年、第15章、662頁。
  - 19) 先妻静江の死について『少国民体験をさぐる』のあとがきで「思いもかけなかったアクシデントが発生して、絶望のどん底へつきおとされてしまった」と述べている。「ボクラ少国民」というシリーズが始められたのは山中静江の助言や労力のおかげであることや静江とのやりとりや思い出が語られていた。
  - 20) 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年H』辺境社、1999年。
  - 21) 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年H』辺境社、841頁。
  - 22) 山中恒・山中典子共著『書かれなかった戦争論』辺境社、2000年、352頁。
  - 23) 山中恒・山中典子共著『書かれなかった戦争論』辺境社、2000年、352頁。
  - 24) 山中恒・山中典子共著『書かれなかった戦争論』辺境社、2000年、351頁。
  - 25) 山中恒・山中典子共著『書かれなかった戦争論』辺境社、2000年、358頁。
  - 26) 山中恒・山中典子『「少年H」の盲点 忘れられた戦時史』辺境社、2001年。
  - 27) 山中恒・山中典子『「少年H」の盲点 忘れられた戦時史』辺境社、2001年
  - 28) 山中恒・山中典子『「少年H」の盲点 忘れられた戦時史』辺境社、2001年
  - 29) 「少年H史実論争 誤認指摘本が火をつけた 薄れゆく戦争の記憶象徴」『読売新聞』、1999年8月30日。
  - 30) 山中恒・山中典子『「少年H」の盲点 忘れられた戦時史』辺境社、2001年。
  - 31) 喜安朗・成田龍一・岩崎稔『立ちすくむ歴史—E・H・カー『歴史とは何か』から50年』せりか書房、2012年、53~75頁。
  - 32) 成田龍一『危機の時代の歴史学のために』（岩波書店、2021、第3章P10、11）は戦

- 後歴史学はしばしば自らを科学的歴史学と認じた。「科学的真理」を主張し、「民主主義的な、世界史的な立場」を表明する綱領がある。しかし「戦後歴史学」のパラグラムそのまでは、もはや現時の状況に対応できず、「戦後歴史学」の歴史認識が通用しないとはだれもが感じていることとしている。成田は現時の歴史学が21世紀の最初の10年代にうまく対応できているであろうかという懸念を持っている。
- 33) 鶴見俊輔『文章心得帖』筑摩書房、2013年。
  - 34) 鶴見俊輔『文章心得帖』筑摩書房、2013年。83～86頁。
  - 35) 山中恒「あとがき 五東透と山中恒との理屈っぽい関係」『青春は疑う』三一書房、1976年、216頁。
  - 36) 35と同上
  - 37) 当時、看板職人であった彼の父親は、中国の北京で看板屋を営んでいた。つまり、父だけが「外地」にいたため、「母子家庭」と同じような環境で育った彼は母親から夫のように頼りにされていたために、転校したばかりでいじめに遭っていた時も母親にはその事実をいえなかったらしい。
  - 38) 菅本康之「日本はどこと戦争したのか」『藤女子文学 国文学雑誌第79号』藤女子大学日本語・日本文学会、2008年、153～175頁。
  - 39) 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年H』辺境社、1999年、50頁。
  - 40) 39と同上
  - 41) 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年H』辺境社、1999年、51頁。
  - 42) 山中恒・山中典子『「少年H」の盲点 忘れられた戦時史』辺境社、2001年。
  - 43) 喜安朗・成田龍一・岩崎稔『立ちすくむ歴史—E・H・カー『歴史とは何か』から50年』せりか書房、2012年、68頁。
  - 44) 妹尾河童「Culture Windows book guide 著者に聞く 少年の目にこだわった理由」『グラツィア』(2(3)、講談社、1997年3月、221頁。
  - 45) 小玉祥子「著者インタビュー 戦中戦後をある少年はどう生きたか」『サンデー毎日』毎日出版、1997年3月2日、76頁。
  - 46) 「Book Maker 反戦小説って言葉は、重くてイヤなんです—妹尾河童 自分の戦争の記憶を若い人に渡したかった」『週刊プレイボーイ』集英社、1997年4月29日、154～155頁。
  - 47) 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年H』辺境社、1999年、843頁。
  - 48) 妹尾河童「Culture Windows book guide 著者に聞く 少年の目にこだわった理由」『グラツィア』(2(3)、講談社、1997年3月、221頁。
  - 49) 尹雄大「ワイド 納得できない ⑩しれっと100カ所訂正の『少年H』」『サンデー毎日』毎日新聞出版、2000年1月9日、26～27頁。
  - 50) 菅本康之「日本はどこと戦争したのか」『藤女子文学 国文学雑誌第79号』藤女子大学日本語・日本文学会、2008年、173頁。

- 51) 50 と同上
- 52) 50 と同上
- 53) 斎藤美奈子『週刊朝日』朝日新聞出版、2002年9月6日、126頁。
- 54) 53 と同上
- 55) 53 と同上
- 56) 斎藤美奈子「間違いだらけの少年H 山中恒・山中典子著（書評）」『朝日新聞』朝日新聞社、1999年7月4日朝刊、17頁。
- 57) 53 と同上
- 58) 「PeOPLe 妹尾河童 初めての小説『少年H』が75万部のベストセラー 少年の目から見た“ほんとうの戦争”を現在進行形で書きたかった」『週刊ポスト』小学館、1997年4月9日、231～233頁。
- 59) 妹尾河童・吉永みち子「大ベストセラー『少年H』の舞台裏を語ろう 配給、軍事教練、空襲、そして終戦、民主主義。昭和ひとケタが生きたあの日」『プレジデント』プレジデント社、1997年5月、64～73頁。
- 60) 斎藤美奈子「間違いだらけの少年H 山中恒・山中典子（書評）」『朝日新聞』1999年7月4日、朝刊、17頁。
- 61) 「抜け落ちていた歴史を補う 『書かれなかった戦争論』共著の山中恒・典子夫妻に聞く」『毎日新聞』2000年8月9日、東京夕刊 6頁。「『書かれなかった戦争論』は『あの戦争』当時に公表されていた一般的な資料を網羅し、当時の人たちが戦争をどうとらえていたかという視点から日中の政治・経済関係や日本の政治機構を考察しなおそうという試みで、戦後のパターン化した歴史史観の争い争うから抜け落ちていた部分を補う力作となっている」
- 62) 「『少年H』史実論争 誤認指摘本が火をつけた 薄れゆく戦争の記憶象徴」『読売新聞』1999年8月30日 34頁。
- 63) 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年H』辺境社、1999年。7頁。
- 64) 「間違いだらけという妹尾河童さん『少年H』」『週刊新潮』新潮社、1999年6月3日、144～145頁。
- 65) 「妹尾河童のベストセラー『少年H』に史実誤認」『噂の真相』噂の真相社、1998年1月、21～22頁。
- 66) 前掲『週刊新潮』6月27日号に掲載  
妹尾河童

「山中恒さんと山中典子さんご夫妻が書かれた『間違いだらけの少年H』は八百四十五項もある本だったので、読むのに3日かかりました。この本を書くために注がれた情熱とエネルギーにはただただ頭が下がりました。『少年H』に「間違った記述が多い」と言われたことに異議を申しませんし、事実誤認を指摘された部分でナルホドと思う所は「たしかに間違っていました」と率直に認めさせていただきます。」

「…指摘で納得できないものもありましたが、山中さんの本で多くのことを学び、勉強不足も反省しました。でも山中さんが望まれるように細大漏らさず資料を網羅しながら小説を書くことは、僕には、とても無理だったと思います。「では書くな!」と言われるかもしれませんが、僕に限らず、あの戦争を体験した人は今のうちに何とかして自分が体験をした周辺のことを隠せずに書き残してほしいと思います。～

山中さんには、腹立たしい間違いだらけの少年 H だったかもしれませんが。でも僕なりに戦争の時代を伝えるために工夫して書いたつもりです。反戦を前面に押し出したリ、資料を読まされるような感じになるのをつとめて避けようと思いました。若い人たちに敬遠されると何も伝わらないからです。僕は戦争とは何なのかということを経験を知らない世代に手渡したくて『少年 H』を書いたのです。」

- 67) 尹 雄大「しれっと 100 カ所訂正の『少年 H』」『サンデー毎日』毎日新聞出版、2000年、1. 2・9、26～27頁。
- 68) 潮 匡人「間違いだらけ」を指摘された『少年 H』の危ない読まれかた『諸君!』文藝春秋社、2000年1月号、187～188頁。
- 69) 「近代デモクラシーは絶対王政への抵抗から生まれた。その根幹こそ表現の自由に他ならない。GHQが戦後日本に植え付けたのは『デモクラシーの精神』ではない。戦勝国のプロパガンダ歴史観である。『少年 H』はGHQが『これが真相だ』と捏造した歴史観に見事なまでに貫かれている」
- 70) 岩崎稔『記憶が語り始める 富山一郎－編』東京大学出版会、2006年、183～188頁。
- 71) 70 と同上
- 72) 70 と同上

## 参考文献

- 妹尾河童『少年 H』上下、講談社、1997年。
- 妹尾河童『少年 H』上下、新潮社、2000年。
- 吉田裕『日本人の戦争観』岩波書店、1995年。
- 山中恒・山中典子『間違いだらけの少年 H』辺境社、1999年。
- 山中恒・山中典子『書かれなかった戦争論』辺境社、2000年。
- 山中恒・山中典子『少年 H の盲点 忘れられた戦後史』辺境社、2001年。
- 山中恒『少国民体験をさぐる ボクラ少国民補巻』辺境社、1981年。
- 山中恒『図説 戦争の中の子どもたち』河出書房新社、1989年、104頁。
- 山中恒『青春は疑う』理論社、1967年。
- 成田龍一『歴史学のスタイル』校倉書房、2001年。
- 成田龍一『戦後はいかに語られるのか』河出書房新社、2016年。
- 成田龍一『危機の時代の歴史学のために』岩波現代文庫、2021年。
- 岩崎稔『記憶が語り始める 富山一郎－編』東京大学出版会、2006年。

鶴見俊輔『戦時期日本の精神史』岩波書店、2001年。

鶴見俊輔『文章心得帖』潮出版社、1980年。

小熊英二『民主と愛国』新曜社、2002年。

小森陽一・成田龍一・上野千鶴子『戦後日本スタディーズ3』紀伊國屋書店、2008年。

喜安朗・成田龍一・岩崎稔『立ちすくむ歴史—E・H・カー「歴史とはなにか」から50年』  
せりか書房、2012年。

菅本康之「日本はどこと戦争したのか」『藤女子大学 国文学雑誌』藤女子大学日本語・日  
本文学会、2008年。

